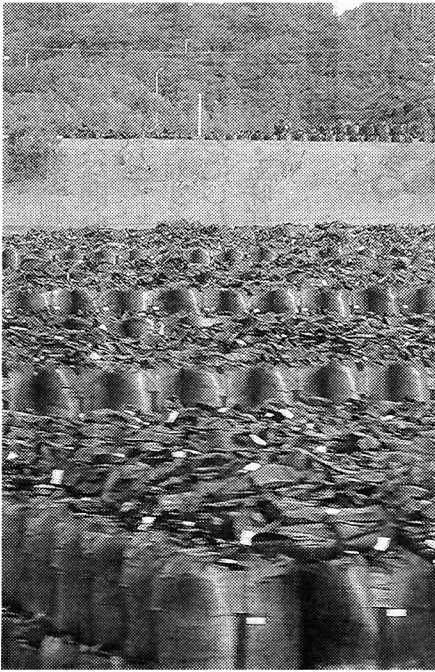


二〇一一年三月十一日のあの東日本大震災発生を知った直後から、すべての人々が持てる力を發揮していかねばならないと、首都圏の志を同じくする女性たち十人が行動を起こした「JKSK結核プロジェクト」。被災地における車座・交流会を定期的に開催し、話し合いの中で浮かんだアイデアを事業化するなど、毎日、東北の復興のことを考えてきました。

九月二十八日、五月から新たに始めた「JKSKボランティアバス」で福島県広野町を訪れました。福島の新しい産業としての将来像を描きなが

## 東北復興日記

60



NPO法人女子教育奨励会(JKSK)理事長 木全ミツさん

## 五輪の前にやるべきこと

ら育てているオーガニックに身を置くと、日本全国後二時四十六分で止まクコットン畑での草取りがオリンピックに浮き立り、家屋、学校は地震でや、収穫作業に汗をかいてる中、それとはま崩壊し、人っ子一人いない。田畑には、除染された後、櫛葉町や富岡町をるで別の風景が広がって訪れました。東京電力福島第一原発から七キロ、第一でした。声が出ません。た土や草木が詰まった黒袋が野積みみされ。真、自分がこの町の住人を訪問しておられるとい

だったら…と、いたたまれない耐えがたい思いでした。オリンピックに浮かれる前に、日本人として、今、なさねばならないことがあるのではないのでしょうか。

安倍総理大臣に、また、毎月十一日に被災地を訪問しておられるという自民党青年局の皆さんに、まず、櫛葉町や富岡町に身を置いて、自分がその町の出身であったら、と考え、そして対応を大切に思いました。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。